

大馬越太鼓踊り



この踊りは、鹿児島では寛正6年（1465年）に踊られた（九州郷土行事写真集）という記述から、また、大永5年（1525年）念仏踊りとして踊られ、百万遍念仏の信者たちが造立した供養板碑があることから、当時薩摩全域で踊られたものらしい。これは入来の社寺新設盛行時とも一致し、中世入来文書によって、明応7年（1498年）7月28日の元村の諏訪座敷定日記によれば、当日の諏訪神社祭列席者は、領主加賀守重聡を初め、守の称号のあるもの15名、介が9名、尉が12名、その他総計44名という豪華な顔ぶれを前に、祭典儀式のみでなく、必ず神楽の舞などと共に奉納されたと記録されている。

江戸時代に入ると泰平の世が続き、他国や他郷の諸芸能の流入が著しく、だいたい18世紀中葉頃までに、今日のような完成された太鼓踊りができたとされている。

本来、武神たる諏訪大明神に奉納するもので、神仏混淆時代の習慣として、同時に町内の主要寺院でも踊り、武運と豊作とを祈って奉納していたが、維新後、廃寺によって諏訪神社と御仮屋馬場だけ踊り、娯楽の少ない農村では一年中で一番にぎやかな祭礼日で、何よりもいれしい休養日であった。その後この太鼓踊りを7月踊りとも呼んでいるが、これは旧藩時代にゴフラク（御法楽）といった諏訪神社の大祭日が毎年7月28日で、この日に太鼓踊りを奉納するように門農家に義務付けられていたためである。諏訪神社は入来郷の祈願社であったため、農民の恐れる台風襲来や害虫の恐れのある10日前のこの日に稲作の豊作祈願をなすのは、この諏訪神社でなければならなかったとされ、霊験あらたかな偉諏訪神社に豊作祈願をなす踊り、これが太鼓踊りである。

現在入来の太鼓踊りには、大別してカンメ（上名楽）、シモンメ（下名楽）、1本矢旗（副田楽）、アケスメロ（蜻蛉舞）の4種があり、主要楽器はいずれも大太鼓と青銅製の鉦を用いています。踊り子の扮装は、カンメとアケスメロが郷土姿、他は農民姿を基本とし、それぞれ工夫を凝らしている。

大馬越のこのシモンメは、鉦打ちは頂に山鳥や雄鶏の尾羽、あるいは造花を飾り、色紙の幣（しで）を垂らし廻した花笠をかぶり、刀はささず、紺着物、袴姿で草履履きという扮装で、太鼓打ちは、太鼓は小太鼓を使い、矢旗は背負わず、紺着物、草履履きという軽装になっているが、これは明治以降、地域感情のもつれから、黒武者、山下、池頭、上原の諸部落で独立して踊るようになったもので、黒武者踊りが大馬越太鼓踊りとして承継されているシモンメ太鼓踊りである。

【奉納・披露】

日程：毎年7月最終日曜日

場所：鷹ノ子神社（入来町浦之名清浦）